

メランコリーの諸相

— Lewis Carroll の “Melancholetta” から派生するもの —

平 倫 子

目 次

1. 序
2. キャロルの “Melancholetta” の成立事情
3. 笑劇 “Away with Melancholy” について
4. “Melancholetta” を読む
5. メランコリーの系譜と A. デューラーの「メレンコリア I」
6. 結 び

1. 序

キャロルの作品に隠された madness について調べたことに端を発して、2002 年から「19 世紀英国の近代化と狂気」のテーマのもとにキャロル論をすすめてきた。

ここでは、1857 年にキャロルが書いた滑稽詩「メランコレッタ」を中心に据え、それを書くきっかけはなんだったか、それを書いたことでキャロルにもたらした変化はどういうものだったか、その気分がどのように彼の創作活動に引き継がれていったか、など「メランコレッタ」から派生してくる諸問題をあぶりだしてみようと思う。

その手がかりに、キャロルの個人史から家庭や社会を取り巻く事柄を取り上げるとともに、英国の変革の時代の、哲学、文学、美術、演劇、科学、医学、心性、のそれぞれの歴史と関連づけて考察する。(以下 Charles Lutwidge Dodgson を Lewis Carroll で統一する。)

2. キャロルの “Melancholetta” の成立事情

キャロルはこの詩を 1857 年に書いている。滑稽詩とは言っているものの、メランコリーをキー・ワードにしてこの詩を書くに至った事情を、キャロルの個人史と結びつけて考えるとき、大きく二つの事柄が浮かび上がる。一つは、1846 年から 49 年までのパブリック・スクール(ラグビー校) 在学中の校風になじめなかった体験、もう一つは、1851 年の母親の急逝があげられるだろう。十代に経験したこの二つが、その後の彼に大きな影響を与えたことは間違いない。

ラグビー校での体験は「二度と繰り返したくない三年間だった」と、キャロルは 1855 年に当時を振り返って言っている(Collingwood, 30)。また 1857 年 3 月 18 日の日記には、オックスフォード近郊のラドリーのパブリック・スクールを訪れたときの感想として、生徒たちが幸せそうな表情をしているのに驚かされたこと、大部屋でもベッドが一つずつ区切られているので、昼の煩わ

しきから逃れられる安心感がもてるのはよいことだ、と書いている。ラグビー校の伝統は、1857年に発表されたトマス・ヒューズの『トム・ブラウンの学校生活』でつとに有名である。ラグビー校在学時のキャロルの日記はないが、1849年5月24日付けの次姉エリザベス・ルーシー宛の長い手紙が残っている。それによれば、上級の生徒監への絶対服従や過度の罰課題、寝具略奪からくる寒さ、盗難、などのあまたの理不尽には触れることなく、ラグビーから6マイル離れたプリンクローのローマ軍の遺跡をスケッチしたこと、ヴィカーズ先生を訪ねてギリシャ語の詩について質問したこと、数学のスマイシーズ先生宅を訪問したこと、買いたい本のこと、買い物のこと、などを書きつらね、家族の消息や訪問客の動向などを尋ねている。不利益を黙っていない魂はまだ育っていないようで、ひたすら耐え、家族に弱みを見せないよう頑張っている17歳の少年の様子が伝わってくる。

この手紙の中で注目しておきたいのは、同年5月はじめに第一回分冊が刊行されたばかりの、ディッケンズの『ディヴィッド・カッパーフィールド』(*David Copperfield*, 合本は1850年刊行)を読んだことが書かれているところである。憧れの作家の出たばかりの物語を読んだ感想を、次のように書いている。「(ディッケンズの)自伝的物語で、(第一回分冊は)出生から子ども時代までが書かれています。筋書きはあまりパツとしませんが、登場人物や場面に面白さがあり、なかでもガミッジ夫人が気に入っています。彼女は、みじめでメランコリックな性格で、何かというと『どうせわたしは、一人ぼっちの後家ですよ。なにもかもがわたしに楯突くんだから。(“lone lorn creetur, and everything goes contrairy with me.”)』と言っていつも泣いています」。

ガミッジ夫人は、ディヴィッドの母親のメイドをしているペゴティの実家に同居している未亡人で、船乗りの夫を海で亡くし、それ以来泣きの涙で暮らしている。船を改造した小さな家で、血のつながりの無い者も含む大所帯の中で泣いてばかりいるので、少なからずはた迷惑である。そういう人物に目がとまり、気に入ったということは、その場面を追体験できたからに違いない。おそらく『ディヴィッド・カッパーフィールド』を読んだときのラグビー校での彼の生活が、ガミッジ夫人に共鳴する気分をはらんでいたのであろう。真面目で几帳面、頭脳明晰で運動嫌い、神経質で吃音癖がある、そんなキャロルが意に染まない日々を重ね、ひそかに泣く場所も持てないわが身をガミッジ夫人と重ねて、彼女に同情したものと思われる。ラグビー校の寄宿舎では毎年病気が流行し、キャロルも百日咳とおたふく風邪に罹ったことがあり、聴力に後遺症が残ったことも不幸なことであった。

1851年1月キャロルがクライスト・チャーチ・カレッジ入学のため家を離れた数日後に母親が急性脳炎で急逝する。それにより家の中に広がったメランコリックな気分は相当なものであったろうと考えられる。上は22歳を頭に、下は4歳までの11人の兄弟姉妹たちは、それぞれの哀しみが、ともすると連鎖して11倍にもなりえたのではないだろうか。

ともあれ十代の後半に彼が体験したこれらの二つの事柄を念頭におきながら、『メランコレッタ』成立の事情を追ってみよう。

1857年4月6日の日記によれば、キャロルはその日オックスフォードのクライスト・チャーチ学寮長ヘンリー・リデルの娘たちの求めに応じてリデル家を訪れている。学寮長の侍医で解剖学教授のアクランド家の子どもたちも来ていて、キャロルは彼らのために笑劇“*Away with Melancholy*”の朗読を行っている。

キャロルはこの笑劇 (farce) を、1855年6月22日、ロンドンのロイヤル・プリンセス劇場で初めて観ていた。その日の日記では、そのあとの出し物の“*Henry VIII*”を、特別の思い入れで

絶賛しているが、前座としてみた“*Away with Melancholy*”も、それ以後キャロルの大のお気に入りのお出し物になった。この芝居は、劇作家 John Maddison Morton (1811-91) が 1850 年、“*Lacy’s Acting Edition*” という芝居シリーズのために、フランスの芝居をもとに書いたもので、1854 年 3 月 13 日にロンドンのロイヤル・プリンセス劇場で初演された。父親も劇作家であったモートンは、フランスで教育をうけ、125 の劇と 100 の笑劇を書いている（ちなみに 6 月 22 日の日記は、「クリミア戦争での英国軍の劣勢はメランコリーなニュースだ」という書き出しで書かれている）。その年の 9 月休暇でクロフトに帰っていたキャロルは、連日“*Away with Melancholy*”を声に出して読んだり、ポケットにしるばせて読み聞かせたりしていた。56 年 3 月 24 日の日記には、その台本をロンドンから取り寄せたことが記されている。また 56 年暮から 57 年 1 月にかけては、クロフトの学校で、マジック・ランターン（幻灯）用の出し物に脚色して演じている。モートンの同じシリーズには、有名な“*Box and Cox*”（1843）もあり、キャロルも観劇し、日記でもそれに触れているが、“*Away with Melancholy*”の記述のほうが断然多い。

それほどまでにキャロルをとりこにした“*Away with Melancholy*”とはどんな芝居だったのかみてみよう。

3. 笑劇“*Away with Melancholy*”について

登場人物は Mr. Windsor Brown, Mr. Trimmer, Windsor の召使の David, Mrs. Maynard (旧姓 Julia Smith), Miss Kitty Cobb, そして宿のメイドの Dainty の 6 人。場所は温泉保養地バースの宿屋の一室。メナード夫人（未亡人）はメランコリックな人物で、幕があくと同時に、今日は気がふさぐ、といて気を紛らそうと“*Away with melancholy, / Nor doleful changes, ring, / For Grieving is a folly, / Then Merrily, merrily sing.*”を歌っている。

この歌は、スコットランドの古い詩で、モーツァルトが歌劇『魔笛』（*The Magic Flute*, 1791）のなかでメロディーをつけた。そのころよく親しまれていた歌らしく、『デイヴィッド・コパーフィールド』にも出てくる。デイヴィッドは母親の再婚により鬱々とした日を送り、勉強にも身が入らない。度量衡の表は頭に入るところか、“*Rule Britannia*”や“*Away with Melancholy*”のメロディーと一緒にたになり、勉強どころではなくなった、と書かれている。

ももとの詩は 3 連で「憂鬱なんか吹き飛ばせ」とうたうライト・ヴァースである。以下に『スコットランド古謡選集』からのものを引用しておく。

Away with melancholy,	憂鬱なんか吹き飛ばせ、
Nor doleful changes, ring,	悲しい鐘を鳴らすな
On life and human folly,	短い愚かな一生に、
But merrily, merrily sing, Fal, lal, &c.	さあ楽しく歌おう、ら、ら、ら。

Come of ye rosy hours,	薔薇の季節よ来たれ、
Gay smiling moments bring,	明るい微笑みとともに、
We’ll strew the way with flowers,	行く手に花を蒔こう、
And merrily, merrily sing, Fal, lal, &c.	さあ楽しく歌おう、ら、ら、ら。

For what's the use of sighing,	ため息は何になる？
While time is on my wing?	その間も時は飛び去る，
Can we prevent his flying?	去りゆく時は止められないなら，
Then merrily, merrily sing, Fal, lal, &c.	さあ楽しく歌おう，ら，ら，ら。

(from *Collection of the Best Scottish Songs*)

この歌は、この笑劇の重要な主導動機（ライトモチーフ）になっている。メナード夫人がこの歌を歌っているところに、キティ・コブが宿のメイドのデインティとともに登場して、知人がすでに到着しているはずだが、という。メイドがその人物の特徴をたずねると、紳士だが、あまり役に立たず、浅ましくて二心のある怪物だ、と言う。メイドは覚えておきましょうと言う。それを耳にしたメナード夫人は、そんな特徴では説明になっていないと高笑いをしながら、あの歌を歌うと楽しくなるが、不思議に昔を思い出してしまうから二度と歌わないことにしよう（若いころのウインザーとの恋の思い出を暗示している）と言いながら、また“*Away with melancholy, Nor doleful changes ring*”を歌いだす。

そこにトリマーが、長いマフラーをしてあらわれ、メナード夫人の歌にあわせて“*For grieving is a folly, Then Merrily, merrily sing. Fal-la.*”と歌う（歌詞に一部変更がある）。トリマーが、いつも僕が来るとあの歌をうたうね、と言うと、それは快活なトリマーに敬意を表する挨拶のかわりだと言う。トリマーはメナード夫人に、持ってきた書類にサインをするよう差出す。そうすれば、あなたはわたしのものになると言って、色目をつかう。メナード夫人は亡夫の財産管理の手続きを弁護士のトリマーに頼んでいたのだった。トリマーは、あなたの将来を保障するために依頼された書類を作ってきた、あなたのサイン次第で心の統合（結婚）も出来ないことはないと言うが、メナード夫人は、これは事務上の書類だから心のほうはそのままにしておく、と冷静に対応する。

トリマーは、メナード夫人は魅力的だ、このマフラーは僕にのぼせているキティがこの前の誕生日に自分のスカーフとおそろいで作ってプレゼントしてくれた。だから仕事の上で力になろうと言っておいた。メナード夫人に会うまではキティーと結婚してもいいと思っていたのだが、と傍白しながら、寒いから風呂に入ろう、と言って入り始める。

そこにウインザーが登場する。彼はびっくりしている裸のトリマーに、僕はかまわないよ、と言う。しかし、身体をこすりながらトリマーは、僕はかまう、と応酬する。ウインザーは、こちらが許すと言っているのにその態度は何だ、と言って互いに言い合う。

そこにウインザーの召使のデイヴィッドが、二通の郵便を持って登場する。一通はデイヴィッド宛、もう一通はメナード夫人宛だ、と告げる。若い頃ジュリア・スミス（George Maynardと結婚してメナード夫人となっていた）に恋をしていたウインザーは、彼女がジョージと結婚してしまい、引き裂かれた悲しみを癒すため、彼女が好きだった“*Away with melancholy*”をいつも歌っていた。いま鉄道が出来たおかげで、離れた二人がふたたび会うことができたことを知って、もう二度と離すものか、と言う。それを聞いていたデイヴィッドが、彼女の夫のジョージはどうするつもりか？と尋ねると、殺してやる、とウインザーは答える。

そこにメナード夫人がやってきて二人は再会する。夫のジョージがそばにいないのをいぶかるウインザーに、メナード夫人は、この18ヶ月間未亡人だったことを告げる。目を白黒させているウインザーに、メナード夫人は、結婚したいくらいあなたが大好きだ、と言ったらどうする？と

持ちかけると、ウインザーは、すぐに結婚しよう、と答えるが、メナード夫人は、そんなに軽々しく言うのなら、トリマーの妻になっちゃおうかしら、亡き夫の仕事仲間のトリマーは、自分に結婚を申し込んでいるから、と言う。

それを聞いたウインザーは、そいつを殺してやる、という。メナード夫人が、わたしを忘れてしまったのね、と言うと、ウインザーは、片時も忘れなかった、あの夕べの二重唱は5年間歌い続けてきた、と言う。でも、もうトリマーと約束してしまった、というメナード夫人に、ウインザーは「ジュリア」と旧姓で呼びかけ、トリマーとの約束を破棄するようせまる。彼とは誓約をした、という彼女に、それなら8時の汽車で駆け落ちしよう、と提案する。

そこにトリマーがやってくる。貴様がトリマーか、と問いかけるウインザーには目もくれず、トリマーはメナード夫人に「医者には、ぼくの神経の病気を治すのが先決で、いまバスをはなれてロンドンに行くのは無理だと言った」と説明する。ウインザーは脇から、それがいい、と口をはさむが、かまわずトリマーは、「医者の話では、近頃は10人のうち9人までが正気を逸しているそうだが、わたしは大丈夫だから、9時の汽車でロンドンに発とう」という。脇からウインザーは8時に発とう、と口をはさむ。トリマーがサインは済んだかどうかを尋ねると、メナード夫人は、まだしていない、と答える。そこで、ウインザーとトリマーの口論がはじまり、メナード夫人に向かってウインザーは8時、トリマーは9時を主張し、「いいね」と異口同音に言うと、メナード夫人は「わかりました」とだけ答える。ウインザーは“*Away with Melancholy*”の歌で合図を送るから、それまで部屋にいるように、と言うと、一方でトリマーは、サインはすんだね、一緒にいくね、と言う。メナード夫人はどちらにともなく「はい」と言って、トリマーと一緒に立ち去る。

ここでトリマーが、「神経の病気だと診断された」と言うところや「近頃は10人中9人までが正気を逸しているそうだと医者がいった」というところが興味をひく。実際に19世紀なかば英国では神経の病や狂気が急増していた事実があった。

芝居ではこのあと、ウインザーは歌のふしと歌詞がごちゃまぜになり、“*Away with Melancholy*”を歌おうとすると、“*Old long ago*”, “*We won't go home till morning*”, “*Rule, Britannia*”, “*The Girl I left behind me*”, “*Pop goes the Weasel*”, “*Buffalo Girls*”などのメロディーが次々に浮かんでくる。混乱して約束の合図の歌が歌えなくなったウインザーが、デイヴィッド相手に取り乱しているところに、トリマーが現れ、「おまえ様子がへんだぞ、狂気の初期症状じゃないか?」と言う。ウインザーがつぎからつぎへと歌った歌の中に、トリマーが自分に約束した合図の歌を聞きつけたキティが、オルガンを持って登場する。ウインザーは8時になっても歌を思い出せず、ついにメナード夫人がやってきて、忘れてしまったの?と聞くと、声が嘎れてしまうまで歌っていた、と言う。そこにトリマーが当のその歌を歌いながら登場したので、合わせてウインザーも歌いだす。トリマーに礼をいいながらウインザーはメナード夫人と腕を組む。オルガンが“*Buffalo Girls*”の歌をかなでると、キティがやってきてトリマーと抱き合う。

評判どおりの役立たずで浅ましく、二心があるやつだ、とウインザーがトリマーをののしると、トリマーは、その言葉をおまえにもそっくり返す、と負けずに言う。すったもんだの末に二組のカップルが成立し、全員で“*Away with melancholy*”を歌って幕が下りる。

キャロルがこの芝居を好み、台本を取り寄せ、朗読し、読み聞かせをし、マジック・ランタン用に脚色して自他ともに楽しんでたということは、単に全体にあふれる明るい滑稽味に惹かれたばかりではなく、むしろ当時の時代の気分として、神経の病や狂気の気配を色濃く反映させ

ている点に関心があったからと思われる。この笑劇は、そうした真面目なテーマを合わせ持った社会劇だったのである。「メランコレッタ」を書くに当たって、この芝居から得たインスピレーションは相当大きかったものと考えられる。

さきあげた1857年4月6日の日記には、さらに続けて「雑誌『トレイン』のために『メランコレッタ』という詩を書いた。その名前は夢の中で思いついたのだが、できればはよくない」と書かれている。結局その詩は「トレイン」誌にボツにされ、自分の習作ノート「ミッシュマッシュ」(“Mischmasch”, 1855-62)に「ミステリー、イマジネーション、そしてユーモアの詩」シリーズ(“Lays of Mystery, Imagination and Humour”)の第四番目のものとして書き入れられた。そのシリーズには次の五つの詩が含まれている。

- No.1 “The Palace of Humbug”, 「悪夢の宮殿」(1855)
- No.2 “The Three Voices”, 「三つの声」(1856)
- No.3 “Tommy’s Dead”, 「トミーは死んだ」(1857)
- No.4 “Melancholetta”, 「メランコレッタ」(1857)
- No.5 “Blogg’s Woe”, 「ブログの嘆き」(1862)

これらはみな夢や死、気質あるいは身体的な悩みに関わるテーマなど、メランコリックな含意のある詩である。

No.1とNo.2はそれぞれテニスの詩「芸術の宮殿」(“A Palace of Art”)と、「二つの声」(“The Two Voices”)のパロディである。これについては拙論「C. L. ドジスン(ルイス・キャロル)の作家への道とA. テニスの位置」(「北星論集」, 2002年)のなかで触れたので、ここでは詳しく述べないが、“The Two Voices”の副題を、テニスは当初“Thoughts of Suicide”としていたことを、ここでもう一度確認しておく(Ricks 97)。

No.3の「トミーは死んだ」は、前書きに「1847年12月31日作」とあるが、それはフィクションで、実際は10年おそく、1857年12月31日の日記にあるように、クロフトでみんなを楽しませるため、「シドニー・ドーベルの『トミーは死んだ』を模した詩」を書いたのであった。キャロルはさらにこの詩に「この雑誌の編集者(つまり『ミッシュマッシュ』の編集者兼作者であるキャロル自身のこと)は、この詩がメランコリックな詩と思われぬように、トミーは猫である、と付け加えておく……」と、内容を説明する長い注を付けている。

キャロルがパロディーに用いた詩の作者シドニー・ドーベル(Sydney Dobell, 1824-1874)は、当時はやった瘵癩派の詩人で、元歌は*England in Time of War* (1856)のなかの“Tommy’s Dead”である。英国では1815年以来、Tommyはイギリス軍隊の兵卒を表す名前になっていた。元歌は次のように始まる。

You may give over plough, boys,	くわを捨てて
You may take the gear to the stead;	武器をもて、
All the sweat o’your brow, boys,	汗して働いても
Will never get beer and bread.	ビールもパンも手に入らないのだから。
The seed’s waste, I know boys;	種はむだになり、
There’s not a blade will grow, boys;	二葉も生えないだろう、

“Tis cropped out, I trow, boys,
And Tommy’s dead.

ばっさり刈られてしまっただろう、
そして、トミーは死んだ。

これはクリミア戦争をうたった陰鬱な戦争詩である。テニスンが『モード』(1856)のなかに収めた「軽騎兵進撃」(“The Charge of the Light Brigade”)という詩を思い出させる。ちなみに『モード』の副題は“Madness”であった。キャロルの“Tommy’s Dead”のパロディーでは、ドーベルから’For the night’s very cold / And I’m very old / And Tommy’s Dead. を各連で繰り返しながら、通風を病む老人が、気立てのいい若ものたちに語りかけながら、静かに大晦日を過ごすバラッド風の詩になっている。読みようによっては暗い雰囲気が漂うが、トミーは猫である、という注があれば滑稽詩として成り立つ。しかしその背後には、戦争に行き帰ってこない兵隊を悼む下敷きがあったのであり、母親を亡くした家族の悲哀感が大晦日ゆえにいっそう深く感じられたのではないかとも考えられる。

No.4について考える前に、No.5の「ブロッグの嘆き」に触れておく。この詩は、1863年大学発行の「カレッジ・ライムズ」(“College Rhymes”)に発表したのち、1869年『ファンタズマゴリア』(『幻想魔景』*Phantasmagoria*)に「サイズと涙」(“Size and Tears”, sizeは音あわせから sighsの意も込めて用いている)という題で入れられた。巨漢のブロッグをからかう瘦身のジョーンズを気にして、メランコリックになるブロッグの練言である。55年から57年までに書かれたメランコリックな一群の詩とは、年月を経過した分だけ異質の詩になっているが、意味はあまり深くなく、まさにノンセンス詩である。

4. “Melancholetta” を読む

No.4の「メランコレッタ」は、その後1862年に大学発行の詩集「カレッジ・ライムズ」(“College Rhymes”)の第3巻8号に“B. B. Ch. Ch.”というイニシアル名で19連のものが載った。1869年には、7連を削除して新たな1連を加えた全13連に短縮したものを、詩集『ファンタズマゴリア』に収めて出版した。このときはじめてアーサー・フロストによる挿絵が二枚付けられた。挿絵1は、カーテンが下ろされた暗い部屋のなか、ハンカチで顔をおおい、泣き嘆く妹のかたわらに本を読んでいる兄のいる絵である(図版1参照, *Phantasmagoria*, 79)。妹のポーズがアルブレヒト・デューラー (Albrecht Dürer, 1471-1528)の銅版画「メレンコリア I」を髣髴とさせる(図版2参照, 詳しくは後述)。挿絵2は、テーブルの上の本に肘をつき、足元にリュートを置いた嘆きのポーズの妹が描かれている。テーブルには骸骨に立てかけられた楽譜が見え、曲の名は「墓地からの調べ」である。そのわきには死神を象徴する砂時計が置かれている(図版3参照, *Phantasmagoria*, 83)。この絵の構図は、1856年サリー精神病院の女性病棟の院長でアマチュア・カメラマンでもあった、ヒュー・ダイヤモンド博士 (Dr. Hugh W. Diamond) が発表した狂気のタイプ別写真 (“Types of Insanity”)のメランコリーのそれに共通するものがある(図版4参照, *The Face of Madness*, Plate 2からのデッサン画)。写真の趣味をもち、キャロルにその楽しさを教え、精神病院の監察官としてイギリス中を廻っていたキャロルの母方の叔父、ロバート・W. S. ラトウィッジのつてで、ダイヤモンド博士を知ったキャロルは、写真と医学を結びつけた最初の人物といわれたダイヤモンドの動向には関心を持っていたはずである。これらの写真を用いてダイヤモンド博士は、1856年5月にロンドンで「狂気の骨相学と心のありように関する写真の応用」と



図版 1



図版 2



図版 3



図版 4

いう講演を行っている（そのことについては拙論「19世紀英国の近代化と狂気——ルイス・キャロルの身体医文化論」,「北星論集」2005年で扱った）。

「ミッシュマッシュ」に書き込まれた挿絵のないものと比べると、この二枚の挿絵が語りかける意味は大きい。これらの挿絵にみられる道具立ては、母親の死を意識してのものに相違ない。1883

年にキャロルは *Phantasmagoria* からまじめな詩をはずし、かわりに “*The Hunting of The Snark*” を加えて *Rhyme? And Reason?* として出版した。(挿絵はないが「メランコレッタ」は『ルイス・キャロル全集』にも収められている。)

このように見てくると、キャロルはこの詩を滑稽詩に分類しているが、彼の意図は別のところにあったのではないか、と思われる。あるいはこの詩から派生してくる、彼が意図していなかったかもしれないものが、数多くあるのではないか、とも考えられる。この詩を詳しく見ておく理由がここにある。少し長い詩であるが、「ミッシュマッシュ」からのオリジナルの19連をここに再録しておく。便宜的に、連ナンバーと、試訳をつけておく。改訂版はオリジナルの19連から、4連、8連、15連、16連、17連、18連、19連の7つを削除し、新しい連を8連として入れた13連からなっている。削除された連は、ナンバー右上に*を付けた。新しく差し替えられた第8連は、8'として [] でくくっておいた。

Melancholetta

メランコレッタ

- | | |
|---|--|
| <p>1. With saddest music all day long
 She soothed her secret sorrow;
 At night she sighed “I fear ‘twas wrong
 Such cheerful words to borrow.
 Dearest! A sweeter, sadder song
 I’ll sing to thee to-morrow.”</p> | <p>日がな一日哀しみの歌を
 歌って、哀しみまぎらしていても、
 夜には決まって反省する
 「楽しいことばを使ったのでは
 ないかしら。親しきもの、哀しみよ！
 明日こそ歌おう、もっと哀しい歌を。」</p> |
| <p>2. I thanked her, but I could not say
 That I was glad to hear it;
 I left the house at break of day
 And did not venture near it
 Till time, I hoped, had worn away
 Her grief, for nought could cheer it.</p> | <p>彼女の言い分わからぬではないが
 聞くたび、ぼくの心は沈む、
 夜明けに家を出て、彼女の哀しみ
 消える時のくるまで
 帰るまいとも考えた、彼女を
 楽しませる手だてがないならば。</p> |
| <p>3. My dismal sister! couldst thou know
 The wretched home thou keepest!
 Thy brother, drowned in daily woe!
 Is thankful when thou sleepest,
 For if I laugh, however low,
 When thou’rt awake, thou weepst.</p> | <p>陰鬱な妹よ、家をみじめにしている
 とは思わないのか！ 兄は
 日々哀しみに沈んでいるのだよ！
 おまえが眠っているときだけが
 そっと笑えるときののだよ、おまえは
 起きれば泣くばかりなのだから。</p> |
| <p>4*. Melancholetta! What a word!
 Far better Julius Caesar,
 But, though in youth, I’ve always heard,
 They christened her Theresa,
 “Melancholetta” she preferred,</p> | <p>メランコレッタ！ これはいい！
 ジュリアス・シーザーよりずっといい、
 小さいときからみんなはおまえを
 テレーサと呼んでいたが、
 「メランコレッタって素敵」と言って</p> |

- And I was glad to please her. おまえが喜ばば、ぼくは嬉しい。
5. I took my sister t'othr day — こないだぼくは妹をつれていったのき
Excuse the slang expression — なまった言い方はご勘弁を —
To Sadlers Wells to see the play, サドラーズ・ウエルズ劇場まで、
In hopes the new impression 気晴らしになるかもしれないから、
Might in her thoughts, from grave to gay おまえの悲哀が快活に
Effect some slight digression. ほんの少しでも変わらないかと。
6. I asked three friends of mine from town この困りごとに、ぼくは町から
To join us in our folly, — 友人を三人呼んでみた —
In hopes their liveliness might drown 彼らの元気が妹のメランコリーを
My sister's melancholy — 帳消しにしてくれるかもと願って、
The lively Jones, the sportive Brown, 元気なジョーンズと、活発な
And Robinson the jolly. ブラウンと、愉快なロビンソンを。
7. The maid announced the meal in tones メイドは食事の合図を陽気にやった
Of mirth, which I had taught her; ぼくが教えていたとおりに、
They acted on my sister's moans それが妹のうめき声を
Much like a fire on water — いっそう大きくした —
I rushed to Jones, the lively Jones, ぼくはジョーンズのところへ飛んで
And begged him to escort her. ゆき、妹の同伴役をお願いした。
- 8*. "If I'm the man so honoured —" 「ぼくがその光栄にあずかれるなら」
He said in accents cheerful, 彼は嬉しげに言った、
"Allow me, miss —" She raised her head, 「お嬢さん、よろしければ」妹は顔を
With countenance all tearful — 上げたが、涙でいっぱいだった —
"If I be he —" "Boo! Hoo!" she said; 「もし、わたしが彼ならば —」彼女は
Matters were getting fearful. いっそう「わー、わー」泣いただけ。
- [8' Vainly he strove, with ready wit, [むなしくも周到の努力はした、
To joke about the weather — 天気のことや、うわさ話、
To ventilate the last 'on dit' — 毛皮の値段など、風穴をあけようと
To quote the price of leather — やってはみたが、彼女が言うには
She groaned "Here I and Sorrow sit: 「わたしは哀しみさんと大の仲良し、
Let us lament together!"] どうか、このまま仲良くさせて!」]
9. I urged "You're wasting time, you know, 「きみは時間を台無しにしている、
Delay will spoil the venison." 鹿肉のごちそうさえも」ぼくが
"My heart is wasted with my woe, 言うと、「わたしの心は哀しみで

- There is — I stood in Venice, on
The Bridge of Sighs,” she quoted low
From Byron and from Tennyson.
10. I won't detail the soup and fish
In solemn silence swallowed,
To sobs that ushered in each dish
And its departure followed,
Nor yet my suicidal wish
To *be* the cheese I hollowed.
11. Some desperate attempts were made
To start a conversation —
“Pray, miss,” the lively Jones essayed,
“Which kind of recreation,
Hunting, or fishing, have you made
Your special occupation?”
12. Her lips curved downwards instantly,
As if of Indian-rubber,
“Hounds *in full cry* I like,” said she,
(Oh! How I longed to snub her!)
“For fish, a whale's the sport for me,
It is so full of blubber!”
13. The first performance was King John;
“It's dull,” she wept, “and so-so!”
Awhile I let her moans go on;
She said “they soothed her woe so!”
At length the curtain rose upon
Bombastes Furioso.
14. In vain I nudged, in vain I tried
To rouse her into laughter:
Her tearful glances wandered wide
From orchestra to rafter —
“*Tier upon tier!*” she said, and sighed,
And silence followed after.
- 15*. That very night I laid a plan
- 打ちのめされそう、ヴェニス の嘆きの
橋に立たせるのだから、妹はパイロン
やテニソンの詩を唱えるのだった。
- 黙りこんでおごそかに口に入れた
スープや魚料理のことも、
見るたびうかべた涙のことも、
皿にこぼれた涙のことも、
食べてしまった皿のチーズでありたい
というぼくの自殺願望も、言いますまい。
- いくつかの絶望的な試みのため
会話の口火がきられた —
「お嬢さん、どちらがお好き？」
と、元気なジョーンズが言った
「狩と釣りでは、お好きなのは、
どちらの娯楽ですか？」
- 彼女の唇は、いきなり下を向き
インドゴムのようにゆがんだ、
「大泣きするハウンド犬が好き」
(げんこつを見舞ってやりたかった！)
「釣りなら、鯨を釣ってみたい、
わん、わん、潮吹き上げるから！」
- 最初の出し物はキング・ジョン、
「退屈だけど、まあまあね」と
泣く彼女。ぼくは泣かせておいたが、
彼女は言った「みんなは彼女の哀しみを
なぐさめたでしょう。」ついに
狂乱の大法螺に幕がおりた。
- むなしくぼくは妹をつつき、彼女を
笑わせようとした、
涙の溢れた目はさまよった
貴賓席から、天井桟敷席まで —
「階段席が累々(涙々)してる！」と言って、
大きなため息をついて、静かになった。
- その夜、ぼくは落胆のあまり一つの

- | | |
|--|---|
| <p>In utter desperation,
And felt myself another man
In fond anticipation,
And long before the day began
Had reached the railway-station.</p> | <p>計画をたてた、
愚かだとの予感があったが、
もう一人の自分になってみた、
そして夜明け前に
駅にたどりついた。</p> |
| <p>16*. Since then, though I can scarce afford,
(I took so little money),
To pay for lodging or for board,
For butter or for honey,
My spirits are so much restored,
I'm sometimes almost funny.</p> | <p>そのとき、ぼくは全く余裕がなく
(お金を持ち合わせていなかった)
一夜の宿賃も、長逗留のそれも、
バターや蜂蜜を買うお金もなかった、
それでもぼくの気分は壮快で
元気も回復していた。</p> |
| <p>17*. I live by hook, or else by cook;
I lodge at present up a
Three-story-back; my favourite book
Is Martin Farquhar Tupper;
My landlady, a famous cook,
Fries bacon for my supper.</p> | <p>どんな手段を講じても
目下のところは滞在する
三階の裏部屋に。座右に
マーチン・ファーカー・タッパーの
本を置いた。女主人は料理上手で、
夕食はベーコンのフライだった。</p> |
| <p>18*. But if my supper is not light —
A pardonable error,
(My doctor says, and he is right;
His name, believe me, 's Ferrer —)
Why then <i>she</i> comes in dreams at night
And fills my soul with terror.</p> | <p>しかし夕食が重いと —
消化不良になる、
(医者 of の言うことは正しいようだ、
名はフェラーとかいったが —)
夜中、夢に妹が現れて
ぼくを恐怖に陥れた。</p> |
| <p>19*. The other night I tried a slice
Of melon, and I eat a
Large quantity, it proved so nice —
That night in dreams I met her,
Green as a melon, cold as ice,
“Dearest!” she moaned, “art better?
Thy melon I — will that suffice?
Or must I add — choletta?”</p> | <p>別の夜、メロンを一切れ試食した、
あまりのおいしさに
たくさんおかわりをした —
その晩、夢に彼女が現れて、
メロンのように青白く、氷のように
冷たく言った「あなた、大丈夫？
メロン (= 憂鬱) が十分なら、
コール (= 癩癩) を少しいかが？</p> |

「メランコレッタ」という詩には、終わりに近づくにしたがって仕掛けがなされ、最後の連にことば遊びの鍵がかくされていた。キャロルは Melancholetta を、melan=メロン=メラン=Black Bile=黒胆汁質=憂鬱質と、choletta=コレッタ=コール=Chole=Yellow Bile=胆汁質=かんしゃくもち、に二分することで、のちの造語、またはカバン語の世界に至る道程を楽しんでいた

のである。1862年にやはり「カレッジ・ライム」にのせた詩‘Poeta Fit, Non Nascitur’（「詩人は作らるるものにして、生まるるものにあらず」、詩人は生まれつきの才によるものなり、という格言をパロディーに仕立てた詩）で宣言していたように、改編にあたって種明かしをしない方法を採用したようだ。

キャロル自身がこの詩を滑稽詩に分類していたので、一般にユーモア詩と考えられているが、分身の登場や、ことば遊びの仕掛けが削除されたヴァージョンでは、滑稽詩の要素はほとんどない。最初にこの詩を書いた時期、キャロルが何を思い、何を意図していたかを考えるとき、家の中を覆っていた母の死に起因するメランコリックな重い空気を吹き飛ばさなければ、という自負があったのではないか。「メロン」や「コレッタ」という単語がきょうだい達のあいだに合言葉のように行き交って、あたかもロール・プレイの手段になっていたのではないだろうか。その役目を取り払われたとき、『ファンタズマゴリア』（1869）の出版に向け、あらたな気分が起こり、終わりの部分の削除を可能にしたものと思われる。しかし1868年には父親の死というまた別の悲しみにおそわれることになる。その喪の仕事は1876年に出版した詩集『スナーク狩り』を書くことに引きつがれた、と考えることができる。

先に述べたように、キャロルは早くからテニスの詩に心酔していたが、1850年に刊行された『イン・メモリアム』（*In Memoriam*）には強い関心をいだいていた。再読、再々読の便宜のために節ごとに、最も重要な名詞や動詞など約3000項目を取り上げてインデックス集を編集し、テニスの了解を得た上で、1862年『イン・メモリアム』と同じ出版社から匿名で出版した。40ページの手帳版ほどの小冊子である。このときやはりテニスの詩を愛読した二人の妹、エリザベスとマーガレットと一緒にその作業をしているのも、彼らにとって憂鬱から逃れるひとつの作業療法のような趣があったのではないかと思わせられる。

5. メランコリーの系譜と A. デューラーの「メレンコリア I」

メランコリーとは何か。四性論では図5のように図解されている（図5参照）。

これは Air, Water, Earth, Fire の Elements (元素) と、それぞれのあいだの Moist, Cold, Dry, Hot の Qualities (性質) と、Blood, Phlegm, Black Bile, Yellow Bile の Humours (体液) と、Sanguine, Phlegmatic, Melancholic, Choleric の Temperaments (気質) を図式化したものである。古来から人間には血、粘液、黒胆汁、黄胆汁の四つの体液があり、血が優勢なら多血質、粘液ならば粘液質、黒胆汁ならば憂鬱質、黄胆汁ならば胆汁質の気質が生まれる、と考えられてきた。それらは四性質に対応すると同時に、四元素とも対応する。

H. テレンバッハはその著『メランコリー』の中で、メランコリー親和型の人にとっては、死が突然割り込んだ後に発症するメランコリーは、価値、秩序の喪失によって誘発されるという考え方を支持して、分離、喪失などの変化により現存在の経路の屈折が起き、危機的状況に陥る——いわばメランコリーの重力圏に接近する、と言っている（167-8）。

R. テューヴ (Rosemond Tuve, 1903-64) は、『ミルトン論』（*Images and Themes in Five Poems by Milton*, 1957）で、「沈思の人」の考察をするにあたり、次のようにメランコリーの概説をしている。

アリストテレスはメランコリーを、ヒポクラテス流に体液説で説明し、メランコリーと天才性とを結びつけた。そして芸術家が才能を高く飛翔させようとして、不可能に思い至るあきらめと

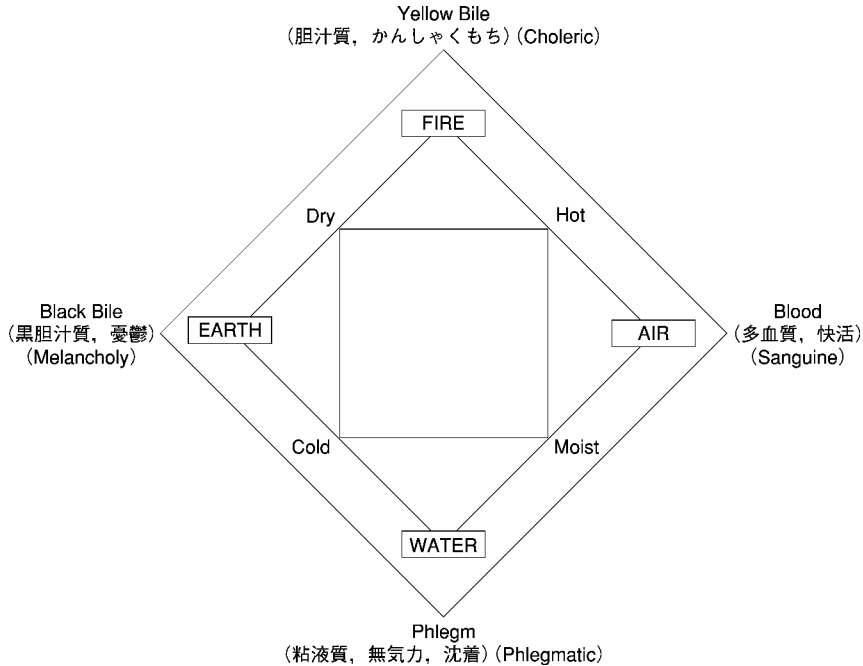


図 5

絶望こそが、メランコリーの最大のテーマであると考えた。

フィッチーノは、メランコリーが病と結び付けられていた歴史を、ふたたびアリストテレスに立ち返って、哲学、文学、芸術に秀でた人は憂鬱質である、という憂鬱と天才の結びつきを強調した。憂鬱質の人は瞑想にふける知的才能をもっており、隠された智慧を読む才能を持っており、人間として素晴らしいと考え、メランコリー論を深めた。

当時よく読まれたコルネリウス・アグリッパが、フィッチーノの著作をもとに書いた『神秘哲学』(*Occult Philosophy*, 1510)では、土星(サターン)がメランコリーを大きく支配する、と見ている。その支配を受けた人は、ふつうの人には見えない隠れた真実(*secret contemplation*)を知ることが出来、そのために神に近づくことが出来、未来の予言をし、詩人になれる、という。そして学問に秀でた人はメランコリー気質を持つと定義づけた(Tuve, 25-6)。

アルブレヒト・デューラーが、あの有名な銅版画「メレンコリア I」(図版2参照)を製作したのは1514年5月17日であった。彼はその直前に母親の死を経験しており、絵の右上の壁にかけられた魔方陣にその日付が刻まれている。この作品では羽根をつけ、重厚な衣装を身につけた女性が、絶望したように頬杖をついている。これは美術史上もっとも謎の多い図像とされているが、創作活動と憂鬱の結びつきを暗喩している点で重要である、と考えられてきた。デューラー以前はメランコリーは、医学と密接に結びつき、さきの四性論で示したように気質の一つであった。デューラーは、フィレンツェのネオ・プラトニズムの考え方に基づいてメランコリーを解釈した。つまり「神の狂気」を黒胆汁と結び付ける考え方である。彼は骨相学から見て自分が憂鬱質であることを自認していたといわれている。

アグリッパはさらに憂鬱状態を想像力、知性、精神の三つのグループに分け、芸術家には「精神」や「理性」よりも「想像力」が重要であり、想像力はその第一のグループに属するとした。

したがってデューラーの絵のこうもりによって示されるタイトルの「メレンコリア I」の「I」の意味がそれを表わしているともみることが出来るという。

キャロルが「メランコレッタ」を含む詩のシリーズ名を「神秘、想像力、そしてユーモアの詩」(“Lays of Mystery, Imagination, and Humour”)と名づけていたのは、メランコリーを1. 想像力, 2. 知性, 3. 精神, に分けて考えたフィッチーノの暗喩ではなかったか。

クライスト・チャーチ・カレッジ出身のオックスフォードの牧師 R. バートン (Robert Burton, 1577-1640) は、1621年『憂鬱の解剖』(*Anatomy of Melancholy*)を著した。そのなかで彼は、メランコリーは誰でもが身に持っている病気であると定義づけをし、治療法を書き、恋と宗教からくるメランコリーを説き、社会改良や、心身の健康を説いた。彼はメランコリーを、貴族またはエリートの病気であると言っている。やはりオックスフォードの医者で牧師のリチャード・ネーピア (Revd. Richard Napier, 1559-1634) は、バートンの説にしたがって診察を行い、カルテを残している。ネーピアはそのなかで、平信徒、つまり一般の人々のメランコリーと呼べる症状は別の言葉 *mope*, *mopish* を使い、貴族のメランコリーと区別した。1981年に M. マクドナルドが編纂した『謎に包まれたベッドラム』(*Mystical Bedlam*)に、ネーピアのカルテを見ることが出来る。*mope* のカルテには、症状として感情鈍磨や無感覚、無感動などがあげられ、一方貴族、貴婦人、騎士、親方夫妻などの *melancholy* のカルテには、失恋、墮落、嫉妬、沈痛、病気の不安、ふさぎこみ、泣き上戸、自殺願望などがみられる (MacDonald, 73, 151)。16世紀後半から病としてのメランコリーは若者たちの流行病になっていた。「ハムレット」はその原型とされている。

次に、先に述べたミルトンの詩「沈思の人」(“Il Penseroso”, 1631)の一部をみてみよう。前座のような「快活の人」(“L’Alegro”)とは対照的な詩である。彼もまたネオ・プラトニズムの流れに沿った詩人であった。

Il Penseroso

Hence vain deluding Joys,
The brood of Folly without father bred,
How little you bestead,
Or fill the fixed mind with all your toys;
Dwell in some idle brain,
And fancies fond with gaudy shapes possess,
As thick and numberless
As the gay motes that people the sunbeams,
Or likest hovering dreams
The fickle pensioners of Morpheus’s train.
But hail thou goddess, sage and holy,
Hail divinest Melancholy,
Whose saintly visage is too bright
To hit the sense of human sight;
And therefore to our weaker view,
O’erlaid with black staid wisdom’s hue.

沈思の人

去れむなしい偽りの「楽しみ」よ、
「愚かしさ」の父なし子、
おまえの玩具のすべても、堅固な魂には
何と甲斐なく、うつろであることか。
愚かな頭がおまえの住み家なのだ。
うつけ者の空想に取りついて、
日の光に浮ぶ陽気を塵のように
眠りの神の気まぐれな家来
あの夢のように移り気な
けばけばしい幻を見せてやるがいい。
いざ、賢く清い女神、
ようこそ、気高い「憂鬱」、
君の聖なるかんばせは人間のまなざしには
余りに輝かしく、ぼくらの貧しい目には
黒く落着いた
「叡智」の色に覆われている。

.....

Come pensive nun, devout and pure,
 Sober, steadfast, and demure,
 All in a robe of darkest grain,
 Flowing with majestic train,
 Over thy decent shoulders drawn.
 Come, but keep thy wonted state,
 With even step, and musing gait,
 And looks commercing with the skies,
 Thy rapt soul sitting in thy eyes:
 There held in holy passion still,
 Forget thyself to marble, till
 With a sad leaden downward cast,
 Thou fix them on the earth as fast.
 And join with thee calm Peace, and Quiet,
 Spare Fast, that oft with gods doth diet,
 And hears the Muses in a ring,
 Ay round about Jove's alter sing.
 And add to these retired Leisure;
 That in trim gardens takes his pleasure;
 But first, and chiefest, with thee bring,
 Him that yon soars on golden wing,
 Guiding the fiery-wheeled throne,
 The cherub Contemplation,

(Milton, 141-2)

いざ、ここへ、清らかに敬虔な、
 静かにおだやかな物思わしげな尼僧、
 色濃く染めた衣のもすそを引いて、
 黒い沙織のストールを
 やさしい肩にうちかけて。
 おいで、だがいつもの様子そのままに――
 憂いに沈んだ控えめな足どり、
 恍惚たる魂を眼にうかべて
 高空と想いを通わせるその顔つき。
 聖い情熱に身もすくみ
 われを忘れて大理石と化したまえ、
 見るものを鉛と変えるその悲しげな
 まなざしをしかと大地に据えながら。
 君の友はおとなしい「平和」と「静けさ」、
 神々と会食し、ミューズの女神たちが
 輪になってジョーヴの祭壇をめぐるつづ
 うたう賛歌に聞きいるあつましい「断食」、
 それに、ととのった庭で自適する
 悠々たる「閑暇」、
 だが誰よりもまず連れてきたまえ、
 黄金の翼ののってかなたを高く飛びつづ
 焔の車輪をつけた玉座をみちびくもの、
 あの天使「瞑想」、
 ……(高橋康也訳、『世界名詩集大成』, 63-4)

このように沈思の人が霊魂と結び付けられ、平和、静穏、閑暇、沈思への祈願がうたわれるが、デューラーの絵のなかの女性の謎に近づくと同時に、キャロルの「メランコレッタ」の不思議な舞台設定の謎も解けてくるようだ。

英国ルイス・キャロル協会のジェフリー・スターンが編纂した『ルイス・キャロル ビブリオファイル』(*Lewis Carroll Bibliophile*, 1997)によれば、キャロル没後のオークションのために作成された蔵書目録には、『ミルトン詩集』2巻本 (*Milton's Poetical Works. With Life, & c., by the Rev. George Gilfillan, Edinburgh, 1853*) が含まれていた。I巻には“Charles Lutwidge Dodgson. Given to him by his affectionate Father on his 21st Birthday, 1853”とキャロルの書き込みがあり、II巻には自筆サインがあるそうである (Sterm, 68)。出たばかりの詩集を、敬愛する父親から誕生日のプレゼントにもらった21歳のキャロルの興奮が、スクリブルマニアとしての彼の創作熱に火をつけたことは間違いない。

6. 結 び

1997年に書かれたウィングイト (Marcel E. Wingate) の『吃音』(Stuttering)によれば、吃音の歴史は古く、エジプトのヒエログリフにすでに見られるという。彼によれば吃音は四性論と関連があり、とくに憂鬱質に多いという。

キャロルが吃音であったことはよく知られているが、当時は年齢、性別を問わずその数はそうとう多かったようである。彼がジョージ・マクドナルドと初めて出会ったのは、ヘイスティングに住む医者でスピーチ・セラピストの Dr. J. ハント (James Hunt, 1833-69) の家であった。マクドナルドは肺を病み、57年から海に近い家を借りて住んでいたが、彼の侍医がキャロルにハントを紹介した。ハントの下にはイギリス中から多くの患者が訪れたという。一方キャロルは、ヘイスティングに住んでいた叔母を訪ねることが多かった。1860年に妹のメアリーに宛てた手紙に、「ハントさんの療法が気に入っている。効果もあるようだ」とある。ドジスン家では、キャロルのほかに弟のエドウィンや姉妹のほとんどが吃音に悩んでいた。キャロルは治癒法を熱心に調べ、自ら実践し、人に勧めることもあった。ハントの朗読療法のほかに Dr. レヴィンによる朗読療法を受けた。p音でひっかかる自分の癖を先生に話したりしている。こうしてハントの治療を受けていたが、1870年ハントの死後はしばらく中断し、1873年からはケント州に住む Dr. H. F. リヴァーズ (1830-1911) のところへ行くようになる。リヴァーズは、ハントの妹と結婚しておりハントの後を継いでいた。キャロルはそこで朗読と対話による療法を受けた。同家に数日間滞在して治療を受けたこともあり、リヴァーズの娘のキャサリンは、キャロルが訪ねてきたときのことを、「ルイス・キャロルの思い出」に書いている (Letters I, 191)。

先にあげた “Away with Melancholy” のようなお気に入りのものをキャロルはよく朗読したり、読み聞かせをしていたが、これも吃音のための療法の一つだったのであろう。

吃音については、時代や環境とも結びついた症例としてさらに調べるつもりである。

あまり見向きもされないキャロルの若書きの詩をとりあげて、そこから派生するものを細大かまわずに拾い上げてみた。これまでキャロル研究の対象にならなかったところかと思う。どの作家でも、どの作品でも「何にどんなわけが」という疑問を解く鍵が込められている。正しく読み解けたかどうか心もとないが、一つの詩をきっかけに、次第に血肉をつけて成長してゆくキャロルの一面を解明出来たように思う。

[本論は 2005 年度北星学園大学特別研究費による研究である。]

[参考文献]

- Collingwood, Stewart, D., *Life and Letters of Lewis Carroll*, T. Fisher Unwin, 1898.
 Carroll, Lewis, *Phantasmagoria*, Macmillan, 1869.
 Ricks, c., ed. *The Poems of Tennyson*, Longman, 1969.
 Diamond, Hugh W., *The Face of Madness*, ed. by Sander L. Gilman, Brunner/Mazel, NY. 1976.
 Tuve, Rosemond, *Images and Themes in Five Poems by Milton*, Harvard UP, 1957.
 Burton, Robert, *The Anatomy of Melancholy*, Vol. I, Everyman's Library, Dent, 1968.
 MacDonald, Michael, *Mystical Bedlum*, Cambridge, 1981.
 Milton, John, ed. by John Carey, *Milton Complete Shorter Poems*, Longman, 1971.
 Stern, Jeffrey, ed. *Lewis Carroll Bibliophile*, White Stone Publishing, 1997.
 Cohen, Morton, ed. *The Letters of Lewis Carroll*, Macmillan, 1979.
 Wakeling, Edward, ed. *Lewis Carroll's Diaries*, Lewis Carroll Society, 1993~2006.

テレンバッハ, H., 木村 敏訳, 『メランコリー』改訂版, みすず書房, 2002.
高階秀爾, 『ルネッサンス夜話』, 平凡社, 1985.
『世界名詩集大成』9, イギリス編I, 平凡社, 1965.

付：モーツァルト作曲の『魔笛』で歌われる“*Away with Melancholy*”の楽譜。ルイス・キャロル協会の木下信一氏に教えていただいた。

Allegretto **Away With Melancholy** **W.A. MOZART**

1. A - way with mel-an-chol-yl Nor dole-ful changes ring On life and hu-man
2. Then what's the use of sigh-ing While time is on the wing Can we pre-vent his

fol - ly, But mer-ri-ly, mer-ri-ly sing Fa la. Come on, ye ro-sy hours, Gay,
fly - ing? We'll mer-ri-ly, mer-ri-ly sing Fa la. If griefs, like A-pril showers, A

scil-ing moments bring; We'll strew the way with flowers, And mer-ri-ly, mer-ri-ly sing Fa la.
moments sad-ness bring, Joy soon succeeds like flowers, Then cheer-i-ly, cheer-i-ly sing Fa la.

[Abstract]

Aspects of Melancholy:
On Lewis Carroll's "Melancholetta"

Kumiko TAIRA

This paper inquires into the reasons why at age 25 Lewis Carroll wrote "Melancholetta", which has been largely ignored by researchers. After referring to three influential works, "Away with Melancholy" by J. M. Morton, "Melancholia" by Albrecht Dürer, and *The Anatomy of Melancholy* by Robert Burton, it is concluded that two experiences of Carroll when he was in his teens — his uncomfortable life at Rugby School and the sudden death of his mother — are the most important reasons he wrote this poem. It is also possible to say that his poems written in his youth are the source of *Sylvie and Bruno*, in which he evolved his concept of spiritualism.

正 誤 表

北星学園大学 文学部 北星論集 第43巻 第2号 (通巻第45号)

頁・行目	誤	正
79頁 上から 1行目	“Tis	‘Tis
87頁 上から 14行目	が編纂した	の著書
89頁[参考文献] 3行目	Ricks, c.,	Ricks, C.,
89頁[参考文献] 7行目	Cambridge,	Cambridge UP